

私は El pajaro del mar 島にゐた。日射に因って、まっ白になっている流木を素のままに組み上げて作られた栈橋が白い砂浜から、あやういオブジェのようにたどどしく突き出ている。栈橋の先っぽに、同じ流木をならべて壁となし、椰子の葉を葺いて屋根とした、らふな小屋があつて、鳥籠のように隙間だらけで潮風が好き放題にぬけるなか、坐つて、蒼い香酒を啜り、燃えるような、碧い海を眺めていた。

少し目線を上げる。

蒼穹は何と高く広いことか。崇高な深い青。濃い紫の濃紺のように遠く、奥の奥まで鮮やかに眩い。何と爽やかなことか、笑いざめくように燦めくさざ波と、静かな潮の乾いた微風。

狂裂自在、自由狂奔裂。

捨てられたブリキ製の空き缶。かたちに區劃され得ず、何かであることがあり得ない、いかようなたちにもあり得ず、いかようなたちにもあり得ないといふかたちにさえもあり得ない、あり得ないですらもなく、すなわち、雪がふわりと降りた白梅、それでしかない、そのことひとつでしかない。繁華街の場末の壁で雨に打たれて破れ剥がれたB級キネマのポスター痕跡でしかなく、そのことひとつでしかない。さであればこそ瞬^{いま}今、かくもあるらめ。

存^{いま}ということ。

存^{いま}とは動かなければならないということだ。動きたいということだ。將に今、動くとい

うことだ。瞬^{いま}今^{いま}將に動いている、ということだ。Actionこそが眞の哲學。現實を変えられてこそ眞の眞實。

それは又、甚深微妙な瞑想の奥深くの静寂、寂滅でもある。行動とは最も深い寂寞である。

旅立たねばならない。いざ生きめやも。私は舳先に勝利のニケ像のついた帆船で海を渡り、広漠たる南大陸^{スー}(Sui)に着岸した。

私は砂漠の最古王国の都で、彝^{いの}之^{いの}ベ裂^{れつ}と合流する。彼もまた奇天烈な男で、紺緋によれよれの袴、傷だらけの古い木刀を帯に刺し、髪はぼさぼさ、まるで江戸末期の脱藩浪士然としている。尖った顎に突き出た鼻、齒が口に収まらないと言わんばかりに口周りが少し膨らんだような顔、眼は深く、眼差しは鋭い。全てが雑で気楽気尽、一向頓着しない。

「さあ、やろうぜ、突^{とつ}とと逝^とくんだ、構いやしねえ、”とても斯くても候”さ」
ベ裂は言った。

私たちは都市を離れ、砂しかない乾燥地帯を駱駝で逝き、乾いた砂岩や、廢墟となった古代の巨大建造物や、そこに彫られ彩色されたヒエログリフの叡智を見た。

この広大な平地に住む砂漠の民や草原の民たちは、かたちを持たぬ天神を単純素朴に信仰し、粗野で残虐だ。さらさらした砂のような現実しかない。野蛮で、勇敢で、哲学など迂遠だと唾棄する。彼らの存在はドライで、即物的だ。無すらも死すほど無味乾燥。

刃で ZAKZAK に截^ひり牽^ひき裂かれ剥^はがされ、まくれ上がった錫メッキの蓋のふちが ZUDA,ZUDA, 截^{きり}口^{ぐち}ぢらぢら。存在の意味不。

私は海のように巨^{おお}きく白い鯨の広大な背に乗った巨象の白い背に、天穹のような天蓋を立てて乗り、ベ裂とともに西の海を涉り、西大陸 (Oeste) に着くと、疾風怒濤のブルー

スが躬らを嗶れ叫び唸る波止場で、同源叭羅蜜斗と合流した。

「へっ、へっ、来たな、野郎ども」

わざと軽薄な物言い。金髪の短いスパイキー・ヘアーを無造作、くしゃくしゃにし、安全ピンのピアスに南京錠を吊るした鉄鎖のネックレス擬き、継ぎ目はつきりと継いで袖を長くしたTシャツにはハーケンクロイツと叛逆磔刑図、Age1977.

「Bopだぜ’ Never Mind, Never More」

HMMWV (ハンヴィー: High Mobility Multipurpose Wheeled Vehicle＝高機動多用途装輪車両、軍用の汎用四輪駆動車。又は Humvee) に乗って砂を巻き上げ、荒野に行く。空は紺碧、風が侵蝕した赤茶色の岩が聳え、百メートルのシーダーが屹立する。

見えてきた巨大都市。

広大な穀倉地帯を持つ超大国ヴォードの都メタルピシユカインペラステュートはわずかな期間に摩天楼が密集して天を衝くように聳える大都会になっていた。これも北大陸の超大国、神聖イ・シルヴィエ帝国の影響か。物質主義の都会はセンチメンタリズムを排除している。剥き出しの空虚な現実。ヘミングウェイのようにハード・ボイルドだ。現実しかない。非存在も存在すらもない。喧騒、ポスターの剥がされた跡のある壁、自動車のメタリックな艶、雨に破れ踏み躪られた新聞紙の活字、ジャズ、カクテル、証券取引所、失業者が路上で寝ているスラム街、アール・デコ様式のビルディング、赤煉瓦のアパートメント。

<https://ssl.xrea.com/sylveeyh.g2.xrea.com/bluezhyper.m4a>

New York. Har-

lem. The old red brick apartment. Black iron outside stairs. The frosted glass in the window of the semi-basement room is broken. The desolate sidewalk. The stone stairs in front of the entrance hall have a handrail. There are 7 steps of stairs. An Afro-American

sits down. His hand has small BLUES HARP. The wavering distortion of the reed is a half-step down, it's supposed to feel like realistic metallic material, mixed with a tin-plate-like high note and a low metallic note like a broken tuba, it's unstable in pitch. The sound that it is dry out, and there was no depth, no the softness and no moisture, and an outline was severe, and existence became clear. The sound that turns the stopper of the old tap that makes the deafening shriek of the languid stillness of the early afternoon of the midsummer'

これを集合の数式で表せば'

$\{\Omega \mid \Omega = A \cup (\text{complementary set of } A)\}, \{\Omega \mid \Omega = \{y\}\}, y \notin (A \cup (\text{complementary set of } A)), \{\Omega \mid \Omega = \{x\}\}, x \in (B), B \subseteq A$

茶園それ

あともう
たしそれ

いれ
貫入 父色

あらはれ

長石釉とき

釉薬の

白だりに

しの釉

卵にかきか
の鉄絵付

美濃の碗

我ら三人は鳳凰の背に宝珠のついた欄干のある楼のような神輿を置いて、東大陸(Este)へ飛び、大華嚴龍國、龍梁劉禪(リョウリャンリューゼン)に着くと、千丈にも及ぶ城壁に囲まれ、地の果てまでも葦の続く大汎都、天平普蕭あまひらふしょうがサイケデリックな意匠で待っていた。公案録『叙無記』肇輯第十七段、眞嚴が龍鳳に「是れ綴られたるの奈何に聞わらず究竟の卷子哉」、龍鳳曰く「されば卷子一切は究竟ならずや」、眞嚴「其れ此の卷子爾のみ已究竟たる所以」とふ。比叡山延暦寺、石垣やら見るうちなうと歌ふ生女房聞こゆる。屋根の上の蜜蜂の骸、川縁の蝶蛹を投石で惨殺。女郎蜘蛛の刺青。羅生門の青侍。

鼻尖で喰い、それ自体が、只、言葉丈ただけ。もうそんなこと、どっちだって構やしないといふ風情。乃ち、長めのマッシュルーム・カットさらりと、ロシアの毛皮の帽子、ペイズリー柄のロング・ジャケットに太いシルクのタイをフランス革命直後のようにグルグルに首に巻いてして顎に届くまで高く巻き、柔らかいモロッコ革の派手で込み入った彩色のブーツを履いている。

彼に案内され、大龍鈴に跨がり、峻険な山岳峽溪を越え、香木の薫る古寺の堂内にて、坐禪を楽しみ、悟りの甘露を味わう。釈迦牟尼如来は凡夫の如く病に罹り、喉の渴きを訴え、老いさらばえて死した。これほど偉大な真理があるうか。眞究竟眞實奥義を牽き裂き躍り翔び超えた眞究竟眞實奥義。偈に頌して曰く、

存在只是存在 它無味又乾澀 甚至不是不存在 無止盡的過度自由 路旁被風雪損壞的古老石像

存在とふは只管存在なる哉。實直觀せば不可得。非知也。路傍石、道祖神石像、石庭、素にて空莫。空は存在を云也。生存を絶し滅す純粹。

我ら四人は緋色の龍神の背に御社を莊嚴し、大陸を四つに裂く Mar Mediterraneo (マル・メディテラーノ、裂大陸間大海洋)を飛ぶ。自在の極み。青蒼碧の海よ。言語も思惟も意味をなさない。眞實は意識の俎上に載せられぬ。まるで、史実に名高い、かの双眸のように。

あらゆる詩人に歌われ、叙事詩に謳われ、抒情詩に詠われ、民の歌に謡われた、思惟に
抛らぬ永遠の哲學、不動の眞實、眞の現實、現に實在して生きている眞理、將にこの瞬今、
神に嘉された頌、御仏の偈、眞の眞咒、イデアの金剛石、存爰に吟つて曰、

Brilliantに燦めく青蒼碧の双眸。

眼の碧さは虹彩と云う、瞳孔を調整する筋肉の一種に因るものだ。虹彩の色素が少ない
と青い光線が吸収されず亂反射し、それゆえ生ず。『いりやあ・イヴイロン』の虹彩は
あたかも精密細緻に過ぎて神儼を帯び、燦然たる曼荼羅のようであった。

虹彩の青や蒼や碧や藍や紺や瑠璃や浅葱や群青や濃紺や濃藍やシディ・ブ・サイドのチ
ュニジアンブルーなどがダイヤモンドの反射や屈折率などの光学的特性を数学的に計
算して内部で全反射する設計の五八面体のように光燦し、燿きのモザイクをなしている。

そのモザイクは単に平面にあらず、奥深さにおいても、幾層もの潮流を重ねる海の、蒼
き燦火のような立体モザイクをなし、まさに三次元曼荼羅。

聖なる彼女の虹彩の亂反射が捉えられないほど眩いのは、虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹
彩との間にある前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる透明の晰らかさを持つことに因
る。

喩えとするならば、湖面から水深一〇〇mの底にある砂粒の、ひとつひとつが表面の凹
凸の一々を、精緻な解析度で明晰に判明できる透明度。

その濃鮮裂晰は煥り螺鈿の靄のよう爛めき、燦火の如く、奥へ逝くに聯れ炳焉かとなり、
その奥の奥にも煥せる、赫奕たる太陽の燦らかさを燦めかせる。

涙を湛えるとき、光輝は煌めきをあふれさせ燦耀を増し、神大火炎のよう、人の魂を射
抜く。

彼女は冤罪によつて火炙りに処された。

我らはNorte（北大陸）に着陸した。

花魁のような緞子を羽織った傾奇者、天の歌舞伎が一九五八年製のキャデラック、デ・
ヴィル・クーペで迎えに来ていた。軽薄に言う、

「ヘイ、てんでイカして素敵だぜ」

我らは世界最大の大陸を北上する。すると。

雪上に独りの男が凜々毅然と立っていた。吹雪のやまぬ永久凍土でアレスのような戦士、大太剣を振るう達人、大きな燃えるまなこに太い眉毛と波打つ髪とが赤い炎春慶である。彼が長髪のカリアたちを伴い、圍繞して奔った。

気候が厳しくなり、車ではきつくなると、龍神と駿馬との間に生まれる龍馬が牽く重機装甲戦車を操る巨漢、軍事マニアの白舟大樂の助けを借りて、峻酷な極寒地のブリザードに耐え、怪物どもを斃し、辺土警備隊を撃破してようやく通過し、北極圏にある大山脈群、聖の聖なる聖域、アカデミア天領に入る。

一九二〇年代のニューヨーク・ギャングのような洒落た優男、犖佐早蕨が白いソフト帽で待っていた。身なりの割にシャイ。Coolだ。どうでもいい。彼が我らに云、

「神聖イ・シルヴィエ帝国が動き出しました。Last Stand だ」

北大陸の超大国、神聖イ・シルヴィエ帝国はその唯物質主義客観科学主義利己利益主義を保持するために、我らに罣礙し、実存を滅尽しようと試みる。だが、利に狡猾な悪の皇帝も大統領も首相も永劫の地獄に堕ちた。利己と榮譽と保身とのために魂を費やす顛倒夢想の愚か者たちは。その魂は無間に責められ、永劫に救われない。

百億の民を擁する超々大帝國は五億の兵を動かし、窮極の戦争を仕掛けてきた。

アカデミア天領の奥の眞神山から白龍に乗りて来たる黒ウィザード・ハットに、大きなカフスの附いた水色繻子の Sgt. Pepper's じみたロング・ミリタリー・コート、片眼鏡の天易真分が加わり、総勢九人の究竟究極の睿智の力を以て敵を迎え撃つ。

ジェット噴射装置によって超音速で飛ぶ数万の戦闘飛行機や数十万の旋回式砲台附重機装甲自走戦闘車輛や地对地砲や核弾頭附の大陸間弾道ミサイルや化学兵器・生物兵器など、攻撃の数々を軽々と無みした。

正義の眞實義は無双無敵でなければならない。それは偉大に聳える。限りなく、際限もなく数千兆の大宇宙よりも遙かに巨大だ。

存り方を超越し、無際限に巨大なる、正立方体の、果てしない純粹透明。空をも絶する絶空すらも絶する眞空をすらも超える眞の眞空。

「既に敵を無みし畢竟つた。ナミブの砂漠のように。全ては成された。それでは、さあ、いざ、逝かん」

我らは真分に導かれ、アカデミア天領の中枢、聖なる学園都市アカデミアの領域に入る。それはアルファベットのIのかたちをした一萬メートルにわずか一メートル程足りない高さの大巖で、遠くからはブルジュ・ハリファのような姿に見えるのは上半を数千の尖塔に覆われ、中央に近づくほど塔の高さが高くなり、一番中枢にあるウパニシャッド大聖堂で高さ二千一メートルに及ぶからであつた。この尖塔ポリスが聖アカデミア学園都市である。

アカデミアの学長である、赤っぽい髪で、鼻梁や頬に雀斑のある十四歳の少女、ユリイカは我らを大聖堂で嘉し祝福した。黒いマントを羽織っているが、顔を見る限りではお転婆な娘でしかない。「よく来たね！（善逝）」

その荘嚴光燦窮極な祝祭には、崇高な聖者や輝かしい賢者や大いなる英雄や偉大なる正義の士にして神に愛されたる者たちなどが集つた。その嚴肅なる齋名を挙げれば、

クラウド・レオン・ドラゴ連邦のANKA、エリコ、ミーシャ。

東大陸の暗殺者、十四歳の少女、いらふ。『睿智』の力を操る、ちひら。銘『清神』の刀を持つ、はらひ。

龍肯の聖剣を持つイリュージョ、イユ、觀自在菩薩の化身にして一樣態であるアヴァ。

巫女騎士イシュタルーナ、雷霆の梢こずえを持つ少年ラフポワ。

殉真裂士ジャン・「アンニユイ」・マータ、男装の女騎士ジョルジュ・サンディーニ、女聖戦闘騎士アンジェラ、少年賢者ダルジェロ、孤児エルビス。

歴代の英雄たちに囲まれて祝福され、燦めく氾濫が光芒を放つ。

最後に我ら七人の名を列す。

彝之べ裂、同源叭羅蜜斗、天平普蕭、天易真兮、天之哥舞伎、炎春慶、白舟大樂、彝佐早蕨、平衡隆臥。至高の燦に莊嚴され。

無償の愛や、愛されるよりも愛しようとする力ある強者の愛や、確固明確な基盤に基づいた、それゆえ現実的・積極的、すなわち前向きな愛、ではない。

敵をも愛し、右の頬を打たれたならば、左をも差し出すような偉大な愛や、純粹無垢で、無辺に公平公正な愛、でもない。

我が子への愛、妻への愛、ささやかな愛。そして、何よりも。

弱い愛、こどものような、愛されたいと希^{こゝろ}う愛。

ありふれたもの、つまらないもの、小さなもの、無価値なもの。侘びて寂びたもの。

日常づかいの缺けた李朝の茶碗、蕎麦の笹の傍に在る擦り掛けの山葵の根茎、セミの抜け殻、雑木の誰も見ぬ雑草、齧ったビスケット、造作なく伐った青竹の截り口、灯籠に青々と生えた羊齒草、逆さに吊るされて乾かされた薔薇の枯れぐあい、山奥の黒く儼かしき大巖、オールド・ファッション・グラスの飲み残しのバーボンの琥珀の残滓、潰れた古い民家の土に半ば埋もれた陶器の破片、畦道の水溜りの蛙、蹲踞^{つくもい}の手水に泛かぶ黄色い朽葉や紅葉、ビニール傘から滴るいくつかの雫、茅葺の瀟洒な古い高麗門の屋根に生す苔、アスファルトの傍らでつぶれている煙草の吸殻。

すなわち、

躬を裂き^き碎き^{かま}天翔躍る、
狂裂自在、自由狂奔裂。
純粹非際限透明。
焉^{こゝ}に畢^{おわ}る。

かく云ふ我は不知^{しらず}、斯^か様^{やう}な事興味なき御仁らが知る、といふ程迄に縛りなく、無^む形^{かたち}とい
へども、いか様^{やう}にもあらぬゆえかたちあらず、かたちあらぬゆえ縛られず、自由^な哉^{なり}とぞい
ふはそれ、理窟にしかず。

以上、
完^{まつたし}。

和綴の冊子があつた。

絹の繊維が混ざった白い手漉きの和紙に繊な雲龍紋が金線で刷られ、その上に篆書や隸書、楷書や草書が綴られ、稀に甲骨文字も鏤められていた。傍ら摺かれたままの毛筆には黒地に漆が塗られ、その上に金の雲龍細工が施され、雲の部分には一部朱色が附されている。九龍紋が彫られた青みのある黒い石には墨汁が乾涸びていた。

一對の龍が玉を奪い合うよう戯れる姿が金泥を以て描かれた墨が隣に置かれている。

「小説さ」

彼が言う。

私は手に取ったまま頁をめくり続けた。

「丁寧に綴じてある。吟味されたであろう用紙は端正に揃えられ、眩いくらいに鮮やかだ。文字の細さも精緻だし、とても繊細な筆運びが爲されている。書体の扱ひ方にも意味があるに相違ない。」

君は哲學の愛好家だから、内容もそう云う類のものなんだろうな。それにしても小難しいタイトルにしたものだ。尤も私などはこの装丁を眼にただけで手で触り、閲覧してみたくなるが。書籍の愛好家には装丁や冊子の厚みや活字やマテリアルなどにこだわる人も多い。それが事實であることは間違いない。

しかし公募に応ずる爲には、この体裁では」

私の言葉に眼を細め、顎を持ち上げて微笑を泛べる。

「そう云うコンセプトチュアル・アート Conceptual Art だね。」

ただ龍安寺石庭のよう枯山水であることを希うばかりだよ。昨今文學に於いては左様な藝術にステイタスはない。然し商業性や顧みられることが少なくとも無価値な譯ではない。いく許かの人々には欣びを齎し得る。

読ませるよりも骨董のよう手で玩ぶ爲に作ったと思ってくれ。点綴する文字を眺めたかっただけさ。右端を貫孔され、糸を通して縛られた、ただの紙の束でしかない。装飾する文様は平仮名や漢字。物品として黙す表情は媚びるでなく蕪雑、在るものである何かと云う以上ではない。だから訴える。存在はなぜ人を惹くのであろうか、と。

男女の情の機微もなくば都会の孤独もない。それが僕には心地よい。抒情性もなく、洞察もドラマもない。

非常に *well-done* だね」